

■ 第36回 多摩川流域セミナー 開催報告

「多摩川の川づくり総点検！ 第三弾！！」～河原が林になった!?多摩川の自然の姿とは～

主催：多摩川流域懇談会

2010年(平成22年)11月14日(日)、「環境」をテーマに多摩川における自然再生の現場を巡る第36回多摩川流域セミナーを開催しました。

今年の流域セミナーでは、今後のよりよい川づくりに向け治水・利水・環境などのスポットを巡りながら、参加者のみなさまとの意見交換を行っていきます。

1. JR日野駅に集合

11月14日(日)午後12時30分、JR中央線日野駅に集合しました。当日は曇りでしたが、多摩川を歩くにはちょうどいい気候でした。

これから3台のマイクロバスに別れて、生態系保持空間(⑧空間)に設定されている谷地川合流点と、永田地区の見学に向かいます。



2. 開会のあいさつ

1つめの見学箇所である谷地川合流点の対岸で開会となりました。

TBネットの中村文明氏から、多摩川では、川を川らしく、自然を自然らしく保っていこうというコンセプトで全国に先駆けて河川整備計画を行っているが、これまでの10年を総点検して今後10年にどう活かすかについて話しあっていききたい。第1弾は治水、第2弾は水流、第3弾の今回は環境というテーマで外来種の問題等の様々な課題を現地で確認し、有意義なディスカッションを行いたいと開会の挨拶がありました。

またセミナーの予定として、谷地川合流点(日野市)と永田地区(福生市)の二箇所を見学したあと、ディスカッションを行いたいという説明がありました。



開会のあいさつ



参加者のようす

京浜河川事務所河川環境課の国頭課長から、「河川環境管理計画が成立されて30年、河川整備計画が成立されて10年をふりかえり、生態系保持空間(⑧空間)という希少種保全のために人の出入りを禁止している場所である谷地川と永田地区を見学します。谷地川では昨年、永田地区では河川整備計画当時から、行われている自然再生事業について意見を聞きたい」という主旨の説明がありました。また、本日のアドバイザーとして多摩川をフィールドとして研究をされている星野義延(ほしのよしのぶ)先生、星野順子(ほしのじゅんこ)先生、倉本(くらもと)先生、市民を代表して柴田(しばた)氏の紹介がありました。



3. 谷地川合流点(日野市)

京浜河川事務所河川環境課の福本係長から谷地川の説明がありました。谷地川は、希少な植物と多摩川らしい自然が残っているため保全している空間であるが、今の課題として急流部の河原が樹林化したり、河口域の干潟や入江が陸化するなど自然環境が変化しているという説明がありました。

谷地川の一部では、ハリエンジュによる樹林化が進み河原が消失し、多摩川八景と呼ばれる場所が失われています。また、ハリエンジュやツル植物などの植生が多くなり単調化していること、樹林化や河道の二極化の問題、環境変化のプロセスについて説明がありました。さらに、環境保全対策として、外来樹木であるハリエンジュの伐採と抑制、砂礫地の復元、また、再生抑制試験区を設けてハリエンジュ抑制の試験を行っているという説明がありました。

星野先生からハリエンジュについて説明がありました。ハリエンジュは、痩せた土地でも生育できるため多摩川上流で緑化樹として植えられ下流に種が飛ばされ広がったこと、また、根を横に張り横から幹を出すため一気に樹林化したと説明がありました。

国頭課長からは、谷地川周辺でも木を伐採したが、1年もたたない間にハリエンジュが生えてきたという話がありました。



谷地川合流点での見学风



対岸に見える谷地川合流点

4. 永田地区(福生市)

京浜河川事務所河川環境課の小平係長から、礫河原再生事業について説明がありました。永田地区は、砂利採取と洪水によって20年の間に、礫河原が草本化や樹木化したため人工的に石の礫河原をつくること、そしてカワラノギクの保護を目的に事業が行われています。現在、カワラノギクを守る会によって初夏や秋に除草を行っていること、さらに今後、下流にもカワラノギクの再生のため礫河原の造成を予定しています。

また、国頭課長から補足として、出水の影響を受ける場所と受けない場所を確保することで、人間の手を加えないでカワラノギクの再生に取り組んでいるという話がありました。

次に、倉本先生からカワラノギクの説明がありました。カワラノギクの個体群は一箇所に生息し続けるのではなく出水や競合植物が繁茂することでその場所からいなくなる性質があり個体群同士の関係が保全には大切であること、そのため1箇所の個体群だけを保全するだけでなく周辺の場所の確保が必要だそうです。また、再造成を行ったA工区では去年は約100株、今年は約500株とカワラノギクは増加しているという説明がありました。

星野先生からは、現在いる多摩川右岸側の樹木の2/3がハリエンジュであり増加傾向にあること、またハリエンジュの種については、花は咲くけれども実はならないものもあり、それを活かした管理を考えているという説明がありました。



5. 意見交換会場(福生市商工会館)に到着

永田地区見学の後、バスに乗って意見交換会場となる福生市商工会館に向かいました。移動する車内ではあらかじめ参加者のみなさんに意見交換までに質問・意見・提案カードに記入をお願いしました。10名の方にご協力いただけました。以下に、その一部を紹介します。



- 今回見た多摩大橋・永田橋上流の、S55当時の風景など、今との違いを知っている方がいらっしゃればお話いただければうれしいです。
- 従来の自然を維持するための実験・研究の現状は大変面白かったのですが、結局、自然には逆らえないという結果になるのではないのでしょうか。川床に堆積する土砂をどうしたらよいのでしょうか。治水のためにも。
- ハリエンジュやカワラノギクの話はとても参考(勉強)になりました。
- セミナーにより多くの方が参加し、理解の輪が広がるといいと思います。
- 河川は水の流れるところが樹林になっては、大洪水の時にまずいのではないですか。もっと昔の河原にもどすべきと思う。
- 絶滅危惧種であり貴重なカワラノギクの群生を見学し、大変感動しました。やはり人の手が加わる事で保存できる自然もあって良いと思いました。と同時に、川の威力を見せつけられた樹林化と礫かわらでした。

6. 意見交換会(前半)

意見交換会は、安元氏(TBネット)の司会で始められ、まず話題提供として3名の方々に発表を行って頂きました。

話題提供1: 多摩川の環境の変化

初めに、国頭課長(京浜河川事務所環境課)から河川敷に対する国の考え方と、これまでの多摩川の環境の変化について説明がありました。

昭和39年の東京オリンピックを契機に、河川敷を運動・レクリエーションに利用することになり、多摩川では河川敷公園の整備が進められたこと、また、多摩川とその周辺地域の自然環境の保全が課題であったため、多摩川における今後の「望ましい利用のあり方」について人工的利用と自然環境保全との調和を明確にするために策定された『多摩川河川環境管理基本計画』について、策定の経緯と整備計画時の改訂について説明されました。

『多摩川河川環境管理基本計画』では、人工系から自然系空間まで5つのゾーンと8つの機能空間を設定しています。今回のセミナーの見学場所でもある、生態系保持空間(⑧空間)では干潟の消失や樹林化による河原の消失など環境が変化してきていることが説明され、変化に対して今後どのような方向性で生態系保持空間(⑧空間)の保全・再生・管理を行うべきかを検討していることや、カワラノギクの保全の取り組みが紹介されました。



話題提供2: 自然再生の現状と課題

話題提供の2つ目として、永田地区をフィールドとして研究されている、星野先生(東京農工大学)、倉本先生(明治大学)に、自然再生の取り組みについて話題提供していただきました。

星野先生からは、永田地区に造成された礫河原にどのような植生が回復するのか、出水を受けてどのように植生が変化するのかを調査した結果の報告がありました。河原の縮小と樹林化は、上流のダム建設と砂利採取という人工的な影響により起きていることが分かってきているそうです。調査結果からは、洪水の影響を受ける場所で新しく植物が現れたり、出水によりなくなったりしていることが分かったそうです。永田地区の河原植物は増減しつつも増加傾向にあるということでした。

倉本先生からは、カワラノギクは河原保全のシンボルであり、環境省のレッドリストで絶滅危惧IB類に位置づけられているものの比較的栽培しやすい植物であることや、カワラノギクの一生について説明がありました。また、カワラノギクは、ずっと同じ場所でたくさんの花を咲かせ続けることはできないということ、出水後にB、C工区にカワラノギクの分布が拡大したことを踏まえると、永田地区のA工区は当初の計画通り種子の供給源として成り立っているのではないかとされていました。永田地区での調査結果では、カワラノギクの種子は地面から0~0.5mの高さを飛んでいるものが多く、石の河原では250m先まで飛ぶ種子もいることが分かったそうです。カワラノギクについて、まだまだ、判らないことがあるので、これからも調査を続けていきたいとされていました。



星野先生による発表のようす



倉本先生による発表のようす

話題提供3：市民からみた生態系保持空間(㊟空間)

最後の話題提供として、市民活動の先駆けである「多摩川の自然を守る会」の柴田氏から、過去の多摩川の姿を記録した貴重な写真と一緒に、環境の変化などをお話し頂きました。

谷地川合流点は、視界が開けて周辺が見渡せたが、現在は樹木が茂り見渡せなくなったことが大きな変化だと言われていました。その他、露出した土丹層はもっと芸術的な形状であったが、現在は礫が流れてこなくなったため形状がフラットになったことや、河床低下が進み水衝部の水際に設置されていた水制が、陸上の高い位置に設置されているように見えるようになったと話されていました。

永田地区のカワラノグクについても、草刈りの維持管理が年々大変になっていることなど、草刈り中の写真と一緒に紹介されました。

多摩川での自然再生については、治水目的の工事が行われる場所でも、これまでの礫河原再生の知見を活かして行うべきと考えているとのことでした。



7. 意見交換会(後半)

休憩の後始まったディスカッションでは、コーディネーターとしてTBネットの佐山氏と京浜河川事務所の山口副所長の2人により進められました。ディスカッションでは次のような内容についての発言があり、それに対するさまざまな意見が述べられました。



昭和50年代と今の多摩川の違い

S55年当時の今回見た多摩大橋、永田橋上流の風景など今との違いを知っている方がいればお話しいただきたい。

柴田氏：最も大きな違いはやはり樹林化だと思う。

カワラノギクの再生について

今後のカワラノギクは自然に任せて放置するのでしょうか？その方が良いと思うのだが。
これに対して、アドバイザーの方々から以下のようなご意見がありました。

倉本先生：カワラノギクは礫河原のシンボルとなる植物であるので、絶滅しないように人の手を加えて行くべきだと思う。

星野先生：外来種であるハリエンジュを川に持ってきたのも人間であり、それによりカワラノギクの生息環境が変化しているならば、人の手でカワラノギクを保全していくべきだと考えている。

野村氏(自然環境アカデミー)：自然に礫河原ができるようになれば人の手を入れなくても良いと思うが、今はそうではないので、人の手でカワラノギクを守っていかなければいけないと思う。



生態系保持空間(㊸空間)(自然)と水辺の楽校(利用)との調和

生態系保持空間(㊸空間)に水辺の楽校を作りたいと要請があった場合はどうなるのか？

国頭課長：生態系保持空間(㊸空間)は本来の自然環境を保全しているところなので、そこへ水辺の楽校をつくることはできないと考えています。水辺の楽校は生態系保持空間(㊸空間)以外の文教空間などで活動してもらえるようお願いしています。

樹木の涵養機能について

前回の水流をテーマにしたセミナーにも関係する流域の涵養という点から、涵養河川として、水辺林は重要であるため、これを自然の復元として河川本来のものと考えられないでしょうか？

星野先生：本来の河川にはヤナギなどの樹木があるべきですが、現在拡大しているハリエンジュは本来河川にあるべき樹木とは違う種類の木です。カワラノギクを再生できる場所も限られているので、そこに生えている外来種(ハリエンジュ)を駆除することによって、礫河原の再生ができればと思う。

生態系保持空間(㊸空間)のあり方

生態系保持空間(㊸空間)は、周辺が住宅地の中にあり、貴重な緑の空間であることがわかりました。ハリエンジュであっても、川の中に多少の樹木があることは景観上好ましいように思います。

一方で、生態系保持空間(㊸空間)の中に、多少は人が入れるように整備してもよいのではないのでしょうか？先に言ったことと矛盾しているようですが、今のままではジャングルの様です。

国頭課長：生態系保持空間(㊸空間)は、保全している場所だと認識している人ばかりだと良いが、知らずに入って来たりするとカワラノギクを踏んだりすることもある。基本的には貴重種があるところなので積極的に人が立ち入るのは難しいと思っている。かといって、情報を流すと貴重種を採りに来る人もいるため情報発信の仕方が難しい。流域で活動されている市民のかたに、生態系保持空間(㊸空間)の意味や貴重種について勉強していただき、多摩川で



活動していただきながら周りに理解をうながしていくことが大切だと思う。

8. まとめ

まとめとして、市民を代表してTBネット代表の中村文明さんから挨拶がありました。

「今年開催した3回の多摩川流域セミナーは充実した大変よいものとなりました。私は源流で活動しているが、倉本先生、星野先生や柴田氏と同じことを追究しているとだと感じています。河原の自然を次の世代の人に残したいというのと、源流の文化を次の世代に伝えたいというのは同じだと思う。今日のセミナーでは、人間の力とどう折りあいをつけて人が保全活動を続けていくのが問題だと感じた。今年、最後まで熱心に議論されたことが来年のセミナーに繋がると思います。セミナーについては、もっと若い人に多く参加してもらえる会にすることが来年の課題です。調査なくして発言なしというのが、多摩川の一番いいところかなと思っております。みんなが言いたいことを言って、みんなが行動して、良い川にしていきたいと思う。来年もよろしくお祈いします。」とあいさつがありました。



最後に、京浜河川事務所元永所長から、「治水と環境は相反するものではないと思うが、最近では治水の予算はあるが、環境面や市民との活動の予算が減らされている状況にあります。これは、環境や市民との活動に対する、国の本気度が試されているのだと思います。今年、河川環境管理計画策定から30周年、来年は二ヶ領用水400周年、整備計画策定から10年、源流研究所ができて10年、日本で初めて開催された流域全体の自治体の代表が集まる多摩川サミットが開催されてから25年という年です。当時の気持ちを忘れずにやっていくことが大切だと思います。



平成23年は、当時から今までの間に何ができたのかを振り返る節目の年になると思う。今年はその助走の時です。これまで行ってきたことを様々な人にみてもらって、少し苦々しい意見も含めて本音で話してもらい議論したいと思います。これからも、当初の気持ちを忘れずに、頑張っていきたいと思います。本日は、どうもありがとうございました。」とあいさつがあり第36回多摩川流域セミナーは幕を閉じました。

第36回多摩川流域セミナー 『多摩川の川づくり総点検！第三弾!!』 ～河原が林になった!?多摩川の自然とは～

No	分類1	分類2	質問・意見・提案	回答(案)
1	意見	あるべき環境	河川は水の流れるところ、樹林にあっては大洪水のときにまずいのではないですか。もっと昔の河原に戻すべきと思う。	ご意見ありがとうございます。川の中が樹林化すること、洪水時の水の流れを阻害することは確かです。現在は、生態系保持空間(⑧空間)の一部で、外来種の樹林を伐採して、礫河原の再生に取り組んでいるところです。
2	意見	あるべき環境	かんよう河川として水辺林は重要な点がある。これが自然の復元として河川本来のものと考えられてないか	本来の河川にはヤナギなどの樹木があるべきですが、現在拡大しているハリエンジュは本来河川にあるべき樹木とは違う種類の木です。カワラノギクを再生できる場所も限られているので、そこに生えている外来種(ハリエンジュ)を駆除することによって、礫河原の再生ができればと考えています。
3	意見	あるべき環境	⑧空間(谷地川)は周辺が住宅地の中にあり、貴重な緑の空間であることが分かった。ハリエンジュでも川の中に多少の樹木があるのは景観上は好ましいように思う。(在来種との共存、⑧空間の設定時の想定とどうなっているかは別として)	
4	質問	風景	S55年当時の今回見た多摩大橋、永田橋上流の風景など、今との違いを知っている方がいらっしゃればお話いただけると嬉しいです。	最も大きな違いは、樹林化だと思います。当時は、中央線の鉄橋から遙か彼方まで見渡すことができました。 谷地川合流点付近の河床は、通称「クジラの背」と言われており、芸術的な凹凸のある岩の風景が広がっていましたが、今日見るとフラットになってきており風景が大きく変わっています。もう一つ、水制工ですが、現在は深堀れしてしまい、高い位置に設置されているように見えますが、昭和60年代当時は水制のすぐ下まで水がきており、もっと浅かったように思います。
5	質問(疑問)	景観の変化	中下流域での高層建築物の林立による景観の変化をどうみるか。	首都圏を流れる多摩川の流域は、昭和30年代以降から市街地化が進み下流域には京浜工業地帯が発展しました。流域内の人口は、流域面積の約1/3を占める中・下流の平野部に集中しており、時代の流れによって、流域の土地利用も変化してきました。沿川の景観の変化は、時代を写していると考えられます。
6	質問	植物	幼少のこと、河原でみた野菊は今日目にした種と違うのでしょうか。	多摩川の中流域に生育する植物なので、以前野菊を見られた場所が中流域であればカワラノギクの可能性があります。カワラノギクの外に、カントウヨメナ、ノコンギク、ユウガギクなどがあり、いずれの花も白から薄い紫色をしています。
7	質問	希少種の保全 治水対策	従来の自然をいじするための実験、研究の現状は大変おもしろかったのですが、結局自然には逆らえないという結果になるのではないのでしょうか。川底に堆積する土砂をどうしたらよいのでしょうか、治水のためにも。	治水の安全性に問題がある箇所は、川底に堆積する土砂を取り除く作業を行っています。
8	質問	生態系保持空間(⑧空間)と水辺の楽校	「生態系保持空間」と「水辺の楽校」の要請との調和？(ワンドづくり、安全な本流の流れづくりと⑧空間)	生態系保持空間(⑧空間)は本来の自然環境を保全しているところなので、そこへ水辺の楽校をつくることはできないと考えています。水辺の楽校は生態系保持空間(⑧空間)以外の文教空間などで活動してもらえるようにお願いしています。
9	質問	生態系保持空間(⑧空間)維持管理	河川敷内の樹林地内のゴルフ練習場、ラジコン飛行場は現在どのようになっていますか、ホームレス小屋があったが居住しているんですか。	⑧空間の管理につきましては、みなさんのご意見をお聞きしながら、よりよい管理を行えるよう、検討中です。河川巡視等を通じて話し合いをしていきたいと考えています。今後ともみなさんのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。
10	質問	生態系保持空間(⑧空間)維持管理	近隣住民の立ち入りはどうか管理されていますか。	生態系保持空間は、基本的に立ち入りが禁止されています。生態系保持空間の前に、看板を設置して機能空間区分と生態系保持空間の説明を掲載しています。

No	分類1	分類2	質問・意見・提案	回答(案)
11	提案	カワラノギクの保全	今後のカワラノギクは自然にまかせて放置するのか？その方が良いと思います。	倉本先生(明治大学):カワラノギクは礫河原のシンボルとなる植物であるので、人の手を加えて行くべきだと思う。 星野先生(東京農工大学):外来種であるハリエンジュを川に持ってきたのも人間であり、それによりカワラノギクの生息環境が変化しているならば、人の手でカワラノギクを保全していくべきだと考えている。 野村氏(自然環境アカデミー):自然に礫河原ができるようになれば人の手を入れなくても良いと思うが、今はそうではないので、人の手でカワラノギクを守っていかなければいけないと思う。
12	提案	生態系保持空間(㊸空間)	㊸空間の中に多少は人が入れるように整備しても良いのでは？今のままではジャングルのように。	生態系保持空間(㊸空間)は、保全している場所だと認識している人ばかりだと良いが、知らずに入ってきたりするとカワラノギクを踏んだりすることもあります。基本的には貴重種があるところなので積極的に人が立ち入るのは難しいと考えています。かといって、情報を流すと貴重種を採りに来る人もいるため情報発信の仕方が難しいのが現状です。流域で活動されている市民のかたに、生態系保持空間(㊸空間)の意味や貴重種について勉強していただき、多摩川で活動していただきながら周りに理解をうながしていくことが大切ではないかと考えています。
13	感想	希少種の保全セミナー	・ハリエンジュやカワラノギクの話はとても参考(勉強)になりました。 ・セミナーにより多くの人が参加し、理解の輪が広がると思います。	ご感想をありがとうございます。 これからも、より多くの方に参加して頂けるようなセミナーを企画していきたいと考えています。
14	感想	希少種の保全	絶滅危惧種であり、貴重なカワラノギクの群生を見学し、大変感動しました。やはり人の手が加わる事で保存出来る自然もあって良いと思いました。と同時に川の威力を見せつけられた樹林化と礫河原でした。	ご感想をありがとうございます。
15	感想	外来種対策希少種の保全	外来種の問題は人為的な原因により引き起こされますが、外来種の生命力という自然の力に対しては人の力ではなかなか太刀打ちできないものだと感じました。その様な意味で、今回のカワラノギクの保護の様に自然の力を利用して在来種を再生する取り組みに期待したいと考えます。	ご感想をありがとうございます。
16	感想	セミナー	・細部まで行き届いた気配りに感服(初参加) ・多くの旧知の方々と顔合わせできた。	ご感想をありがとうございます。 今後も、是非セミナーにご参加ください。